

## 小林稜平日本学術振興会特別研究員に日本生物物理学会若手奨励賞

この度、「ミトコンドリア型ATP合成酵素の阻害因子IF<sub>1</sub>が示す回転方向依存的な制御機構：1分子操作実験と分子動力学シミュレーション」という研究題目で日本生物物理学会の若手奨励賞をいただきました。この賞は生物物理分野で活躍しようとする若手会員に対して将来への期待を表彰するもので、書類審査による一次選考と口頭発表を審査する二次選考を通じて、特に優れた発表を行った5人以内の研究者に授与されます。

修士学生の時、私をはじめて学術会議に参加したのは生物物理学会で、拝聴した最初のプログラムが若手奨励賞の口頭発表でした。若手の研究者が自身の研究について情熱を持って話す姿は私にとって憧れの存在になり、いつかは自らもこの舞台上で講演してみたいと思うようになりました。また、昨年度の生物物理学会では分子研から米田さん、古池さんが同時受賞し、私も続いて受賞できればと考えていました。今回の研究発表は前職と現職で行っ

た異なる分野の研究を融合させたものです。長年にわたり生化学実験を中心に行ってきた私が、計算の分野に移行した際は今後の研究がうまく進むか不安でした。実際、最初の1年は計算科学研究に慣れることに精一杯で、観察したい現象が計算機上で再現されずもどかしい日々でした。その度に、岡崎先生にはディスカッションにお付き合いいただき、研究の方向性や計算科学研究のポイントなどを話し合ってきました。試行錯誤の末、少しずつ成果を上げることができ、学会での発表に至るまでの道のりとなりました。とはいえ、今回は計算分野の内容で発表する最初の学会で、発表方法の要点が分からず準備に時間を要しました。本番前には岡崎グループの皆様発表の練習にご協力いただき、表現の確認や予想される質問に備えることができました。

今回の学会では、発表後に多くの方々から直接質問や感想をいただきました。これほどの反応を得られるとは思っ

ておらず、研究や発表の準備をしてきて良かったと感じる経験となりました。最後に本研究を共に進めてきた岡崎圭一准教授、前職の東京大学の野地博行教授、上野博史講師に感謝いたします。今後も良い成果が残せるように精進していきます。

(小林 稜平 記)



授賞式直後に飯野亮太教授に撮っていただいた1枚

## 分子科学研究所50周年のご案内

分子科学研究所は、広く研究者の共同利用に供する事を目的に、1975年4月に設立され、2025年に創立50年の節目を迎えます。これまで様々な物性や機能を有する分子の構造や機能の発現機構、電子状態などの解明を目指す国内外の研究を施設利用や共同研究で支えると共に、自らも実験と理論の両面から分子科学を先導する研究を推進してきました。

この、創立50周年という大きな節目を記念するためのさまざまな記念事業を実施し、創立50周年記念事業では、日頃ご支援をいただいている皆さまをお招きしての記念式典のほか、座談会などの各種記念事業を予定しています。皆さまに、より身近に分子科学研究所を感じていただくとともに、さらなる研究活動の活性化を目指しています。ぜひ多くの皆さまのご指導・ご鞭撻のほどお願いいたします。



分子研50周年記念特設サイト  
<https://www.ims.ac.jp/50th/>